



日本尊厳死協会副理事長・長尾和宏氏に聞いた

## 「リビングウィル」の啓発になる映画です

「終の信託」は“リビングウィル”的啓発になる映画だと思いました。“リビングウィル”とは命の終わりを自分で決めて宣言誓書に署名すること。その“リビングウィル”を提唱し、生命の最期を大事にすることをうたった人権団体が「日本尊厳死協会」です。1976年に設立され、現在の会員は老若男女12.5万人。全人口のわずか0.1%、米国では41%です。だからこの映画を見て“尊厳死”や“終活”について考えてほしい。

映画の中で、女医が患者さんの意志を尊重し尊厳死を選択したことまでは倫理的に違和感を感じませんが、患者が息を吹き返したことで慌てた彼女は大きく判断を誤ってしまいます。そのまま待つか再挿管するのか、落ち着いて考えるべきだった。結局、彼女の判断が罪に問われることになる。医者も人間ですから完璧じゃない。彼女のような心の揺らぎは常にあります。患者の心に寄り添う良い医者だけに気の毒です。もしあの患者さんが最期を女医に託したことを書面で残していれば、事件にはならなかつかもしません。リビングウィルの重要性が見事に描かれています。そしてク

ライマックスの取り調べはあれぞ司法です。大沢たかおさん演じる検察官が言う通りです。彼の演技は圧巻でしたね。

この映画を医学生にも見せたい。彼らの見方や感性を知って適性を見る教材になります。基本的に医療は「人間愛」。この映画は愛で、医療で、看取りなんです。高齢化の時代、この映画をたくさんの人々に見てもらつて、自分の終末を決めて生きる“終活”や“平穏死”“終末期医療”について考えるきっかけにしてほしいと思います。



医学博士  
日本尊厳死協会副理事長  
**長尾 和宏氏**

ながお・かずひろ／1958年香川県出身。  
84年東京医科大学卒業後、大阪大学第二内科に入局。95年兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。複数の医師による365日24時間体制での在宅医療に従事。『町医者カシリーク』『パンドラの箱を開けよう』ほか近著『平穏死』10の条件』など著書多数。

原作を読み始めてすぐに映画にしたいと思いました。そこには僕が思う“大人の鑑賞に堪える映画らしい映画”にピタッと来るシチュエーションがたくさんあつたんです。例えば権力の象徴である検察庁の前に一人たたずむ女、中に入る一人ボツンと待たされる。これから何が起きたか判らない不安の中でたぶん聞のが撮りたかった理由です。この作品には医療問題や検察での取り調べなど重要なテーマがありますが、僕が一番ひかれたのは、人の思い、人と人が対峙する時に流れる空氣感です。綾乃と江木がいる空間。江木が満州での出来事を語る真夜中の病室。外は雨。あるいは取調室。綾乃が検事と向き合う緊迫した空氣。その濃密な空氣がリアルに感じ取れる“映画らしい映画”を作りたい、という僕の映画監督としての欲求に原作がぴたりとハマったんですね。作者の朔立木さんは「それでもボクはやってない」で知り合った現役の弁護士さんで、作家としても法律家としても尊敬できるリベラルな方です。

僕の映画の中で唯一異質なのが「それでもボクはやってない」。日本の刑事裁判の現実をきちんと伝えたかったので面白くしようとは全く考えなかつた点で

# 明日公開 終の信託

映画らしい映画を作りたかった

# 人は愛を裁けるのか

国内外で高い評価を得たヒットムービー「Shall we ダンス？」から16年。周防正行監督が再び草刈民代、役所広司を主演に据えた最新作「終(つい)の信託」が明日公開される。終末期医療を背景に描いた奥深い人間ドラマは、観客にさまざまな思いを喚起する力作だ。朔立木(さく・たつき)の小説を基に脚色も手がけた周防監督が映画への熱い思いを語った。

「役者さんはすごい！」  
と思いました

江木は自分の最期を綾乃に託します。彼は知的で優しい人ですが、良い家庭は築けなかった男。妻を弱い人間だと決めつけ、息子も娘も見舞いにすら来ない。そんな男が最後に女医さんに甘えてんですね。役所さんは申し分ない味を出してくれました。しかも役所さんのリアルなゼンの発作や減量は、僕がお願いしたわけではなく、役を成立させるために何をすべきかを自身で考えて準備してくださいました。草刈も数ヶ月前から準備をしてました。僕の奥さんですが、撮影中はそれぞれの仕事に専念するため別居しました。厳しく尋問する検察官役の大沢さんとほりハーサルを重ねましたが、本番の緊迫感は想像以上でした。

大沢さんは裁判を傍聴し、検察官がどういうものかを自分で勉強して現場に来てくださいました。役作りの根本は全てお任せしました。検察事務官役のオーディションで決めたんです



とありました。そこには僕が思う“大人の鑑賞に堪える映画らしい映画”にピタッと来るシチュエーションがたくさんあつたんです。例え権力の象徴である検察庁の前に一人たたずむ女、中に入る一人ボツンと待たされる。これから何が起きたか判らない不安の中でたぶん聞のが撮りたかった理由です。この作品には医療問題や検察での取り調べなど重要なテーマがありますが、僕が一番ひかれたのは、人の思い、人と人が対峙する時に流れる空氣感です。綾乃と江木がいる空間。江木が満州での出来事を語る真夜中の病室。外は雨。あるいは取調室。綾乃が検事と向き合う緊迫した空氣。その濃密な空氣がリアルに感じ取れる“映画らしい映画”を作りたい、という僕の映画監督としての欲求に原作がぴたりとハマったんですね。作者の朔立木さんは「それでもボクはやってない」で知り合った現役の弁護士さんで、作家としても法律家としても尊敬できるリベラルな方です。

異質です。それまでの「シコふんじやつた」や「Shall we ダンス？」は面白くて良い映画にしたいという野心があつたし、この「終の信託」も同じアプローチです。中心にあるのは女医・折井綾乃と患者・江木秦三との切実な「愛」であり、その愛ゆえに綾乃の生き方が問われ、裁かれるラブストーリーです。これまでとディストは違いますが、力のある良い映画にしたいという思いで作りました。